超日月光

発　行　所
長崎教区仏教婦人会連盟
諫早市新道町50-3
TEL　0957㉒3011
発　行　日
2023（令和５）年 12 月 12 日
第　45　号
印　刷　所
第一印刷株式会社

「世界仏教婦人会大会に参加して」

仏教婦人会連盟
副委員長　酒井　静香

去る5月11日～12日に「第17回世界仏教婦人会大会」が京都の地で開催され、長崎教区より60名の会員の皆様と参加いたしました。

この大会に先立って、本願寺では「親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年慶讃法要」が開催されており私達も11日の法要に参拝することができました。広い御影堂の廊下までいっぱいの参拝者。その中で一糸乱れず進行、ジーンと心に体に染み渡る読経の中で、脈々と受けつがれてきた800年の重さとお念仏の力を信じてつながる力を感じました。

その後、世界大会の会場となる京都国際会館に移動し、ウェルカム行事として「ワークショップ・交流会」が開催されました。

全国より約2000名、ハワイ、カナダ、南米、北米より400名の参加者が、6名づつになり交流会が始まり、プレゼント交換をし、にぎやかに楽しいひとときとなりました。

翌12日朝9時半「ご縁を慶び、お念仏とともに」を大会テーマとして開会式が始まり記念講演、体験発表、総会と続きました。

外国で暮らしている日系2世・3世の方々の体験発表では、両親よりしっかりお念仏を受け継ぎ、信じて、子や孫そして地域の人々にその輪を広げようと活躍されている様子が力強く発表される姿、声に感じられ自分の姿を考える時間となりました。私にとってお念仏の力を感じ考える大会でした。

皆様お世話になりました。ありがとうございました。

次の大会は、4年後の2027年9月11日～12日、ハワイのホノルルにて開催されるハワイ大会だそうです。行けたら良いですね！

合掌

「世界仏教婦人会大会にご縁をいただいて」

五島組元海寺坊守　七里 倫子

第17回世界仏教婦人会大会にご縁を頂く事ができました。

「ご縁を慶び、お念仏とともに」をテーマに、北米・ハワイ・カナダ・南米からも同じ仏教婦人会のメンバーが集われましたこと、とても有難く尊いご縁に恵まれたこと嬉しく思います。

世界大会前には、ご本山で行われた慶讃法要へ参詣させて頂きました。ご本山へ初めて参詣された方は、「立派なお寺で感動します！」と言われ、境内では小学校の先生をされていたご門徒と教え子との50年ぶりの嬉しい再会もありました。その後、世界大会の行われる京都国際会館へ出発。到着したとたんウエルカムイベントとして用意してくださったワークショップに「私はIKENOBOYSば見てくっけん！」「ふたり芝居のちょうど始まるけん行ってくっけーん」とあっという間に散らばり、京都らしく竹を使った生け花パフォーマンスのダイナミックさと確かにイケメンやった！という感想に笑い合い、「え！私、日本語と五島弁しか喋れん！」と言いつつ海外の開教区の方と、しっかりプレゼント交換をし、なぜか手を握ぎりあってお話をされていて、どこが人見知りなん？とつっこみたくなったり、五島が朝ドラ「まいあがれ」のロケ地になったこともあり会話がはずんだり、日本のおどり(春駒)、ハワイのフラダンス、ブラジルのサンバなど歌や踊りで盛り上がったり、ホテルまでのバスの中は「楽しかった～。また来たかね～まだ、1日目よ～」と楽しい一日を過ごさせていただきました。

世界大会2日目では、シンガーソングライターのちひろさんが九条武子様の御心を歌にされ素敵な歌声と歌詞に感動をし、森田眞円先生の講演をお聴聞させて頂きながら同じ浄土真宗の門徒さんが海外にも日本にも沢山いるんだと喜ぶ姿を見た時、心から素晴らしい一日を過ごさせて頂いているなぁと感謝の2日間でございました。この大会を成功させるにあたり、総連盟の方々、沢山のスタッフの方々にお力を頂いた事と存じます。尊いご縁に感謝しつつ、元海寺17名は五島弁丸出しの珍道中を大いに楽しみ、これからもお念仏とともにご縁を慶びたいと無事に帰島させていただきました。

ご法話

大阪教区榎並組法栄寺前住職　小林　顯英師
〈二〇二三（令和五）年度〉
長崎教区仏教婦人会大会（総会）実践運動研修会　ご講師

もう随分前のことですが、広島県竹原市のお寺で、このように書かれた色紙を見せていただいたことがあります。

常に居ますを佛という
此処に居ますを佛という
共に居ますを佛という
この佛を南無阿弥陀佛という
このいわれを聞いて歓ぶを信心という
称えて喜ぶを念佛という

岩本　月洲師

岩本月洲師（私は詳しくは存じません）の米寿のお祝いの会で記されたお言葉と、伺っております。

浄土真宗のみ教えが、見事に凝縮して表現されており、初めて出遇った時は、言い知れぬ感動を覚え、法話の中でも度々引用させていただいています。

常にとは、いつでもであります し、此処にとは、私とであります。そして、共にとは、一緒にということであります。つまり、いつでも私と一緒にましますのが、「南無阿弥陀佛」の如来さまであります。ということになります。

無人島に一人で居ることよりも、大勢の人の中にありながら、私の存在にすら気づいてもらえない。我が思いをわかってくれる人がいない。孤独よりも、孤立の方がつらい。と聞かせてもらったことがあります。

私は無人島に一人で居る。という孤独は、全く想像がつかないのですが、我が思いを分かってくれる人がいない。自分の居場所がない。透明な存在で、私が居ることにさえ気づいてもらえない…孤立のつらさは知っているつもりです。

『仏説無量寿経』（注釈版7頁）に、「不請の友となる」と示されています。衆生が請願しなくとも、衆生のために大いなる慈しみをもってその親友となる人。と脚注に説明があります。

私にとって「なにが一番つらいのか」と考えてみますと、我が思いをわかってくれる人がいない。別の表現では、居場所がない。一人ぼっちである。ということです。

この私の「つらさ」「悲しさ」「苦しさ」を先に見抜き、知り抜いてくださった阿弥陀さまが、先に「南無阿弥陀佛」と、声の佛・言葉の如来となって用いてくださっているのです。

闇は、門構えの中に音という字を書きますが、音・声の届いていない状態と私は読ませてもらっています。

私自身は、自分の在り様・居場所を知っているつもり、わかっているつもりでいます。だから喚び声が届いていないのです。

私の居場所・在り様を見抜いてくださった阿弥陀さまが、先に到り届いてくださり、「すでに一人ぼっちではない。阿弥陀が一緒に居る」と私を喚び続けてくださっていたのです。

「決して見捨てることはない。一人ぼっちにはしない」と用いてくださる阿弥陀さまと共に、思うようにはならない日々であっても、力一杯・精一杯、「生まれさせていただけてよかった・遇えてよかった」と生き抜かせていただきたいものです。

仏教婦人会連盟行事予定

〈二〇二三（令和五）年度〉

❀教区行事

・寺族婦人・代表者研修会
期　日：二〇二四（令和五）年二月十三日㈫・十四日㈬
ご講師：野村　康治　先生（本願寺派布教使／大阪教区中島東組瑞松寺住職）
会　場：本願寺長崎教堂　本堂
担当組：十三日㈫　長崎西組
十四日㈬　島原南組
参加組：十三日㈫　長崎組、長崎西組、諫早組、平戸組、五島組
十四日㈬　佐世保組、諫東組、島原西組、島原南組、島原北組

〈二〇二四（令和六）年度〉

❀教区行事

・長崎教区仏教婦人会大会（総会）
期　日：二〇二三（令和五）年六月十八日㈫～十九日㈬
会　場：ホテル南風楼
講　師：三宮　享信　先生（本願寺派布教使／滋賀教区滋賀組正源寺住職）
担当組：五島組
・教区仏教婦人入門講座〈全三回〉（例年七・九・十一月）
期　日：未定
会　場：本願寺長崎教堂　本堂
研修形態：ハイブリッド
講　師：塚本　一真　先生（本願寺派総合研究所研究員／佐賀教区三根組徳常寺）

❀九州行事

・浄土真宗本願寺派九州地区門信徒の集い「第三十五回　仏教婦人大会」
期　日：二〇二四（令和六）年十月二十二日㈫
担当教区：大分教区
会　場：別府国際コンベンションセンター（B-Con plaza）

山門に入る

佐世保組　正法寺編

「鵜渡越よいとこ 登ってござれ 九十九島はひと眺め」

先人の方が汗をふきふき長い登山道路を登り、親鸞聖人の銅像前より眼前に広がる九十九島を眺めながら詠まれた歌の一つです。

コロナ禍で三年ぶりとなりました、広報部の取材は、この度、十月後半、澄み渡った秋空の下、佐世保市にあります正法寺様にご縁を頂きました。正法寺様は、佐世保市の繁華街のすぐそばにあり、生活と地域に密接した町のお寺さんというのが印象的でした。本堂の中は木造で静かで厳かな雰囲気の中、坊守さんより温かいお茶と佐世保の銘菓のおもてなしを頂き、ご住職さんより優しい口調で丁寧に佐世保市の鵜渡越にある親鸞様の銅像についてお話を頂きました。

本堂にて記念撮影

鵜渡越に親鸞聖人の銅像が建立されたのは、大正十四年十月、今から八十余年の昔のことです。景色の良い鵜渡越に、熊本のお念仏を大事にされて通称「念仏軍曹」と呼ばれていた小山寿八郎氏の発案で、立教開宗七〇〇年記念事業として、佐世保市琴平青年団が中心になって、鵜渡越に聖人の尊像が建立されました。宗派の異なる人も有るため、なかなか容易には捗らなかったそうですが、様々な協力を得て尊像建設に至ったそうです。

正法寺さま

正法寺保管の初代親鸞像とご住職さま

この鵜渡越の親鸞聖人の銅像は台座六メートル、大きさ五メートル全長十一メートルの堂々たる銅像でした。当時の銅像周辺の様子は、銅像前の広場に大きな鐘楼があったり、つつじがきれいに咲いていたり、茶店があったり、春は花見、夏は夏祭りで賑わい、広場の中央の土俵で相撲をとったり、かけっこをしたりととても賑やかだったようです。

しかし、親鸞聖人の銅像は昭和十九年六月の大東亜戦争の際、供出の運命に遇います。ところが、供出の時に親鸞聖人の頭部がゴロンと転がり、供出をまぬがれたそうです。その頭部を建造に携わった正法寺のご門徒さまがご住職様にお願いをされ、今現在は、正法寺さまの本堂下に大事に保管されています。

ご住職さまの丁寧なご説明に皆真剣！

戦後、門信徒の皆様が当時を思い出され、親鸞聖人の銅像を再びこの鵜渡越に造られました。前の像は銅でありました。この度はセメント造りとなりました。そして、昭和三十一年十月に完成、落慶法要、二度目の建立法要を執り行い大変にぎわったそうです。「あれから四十年以上の月日が流れ、今は、年に一度十月に野外法座が催され、ご門徒様と共に念仏のよろこびをいただいております」。と平成十四年当時に記された資料からも、大切に喜ばれていた思いが伝わってきました。

ご住職様のお話の後、実際に親鸞聖人の銅像の頭部を保管してある場所に案内していただきました。本堂そばの階段を下りていき、ひんやりとした空気の部屋には、当時の親鸞聖人の頭部の銅像が安置してありました。ご住職の肩ほどの大きさに広報部一同とても驚きました。親鸞聖人の表情はとてもお優しく、微笑んでいるようにもみられる目じりや口元。おでこのしわやしっかりとした眉毛など今にも「ようこそようこそお参りくださいました」と語り掛けてくださるような表情に思わず皆手を合わさずにはいられませんでした。

空からの鵜渡越公園

さて、それからは正法寺のご住職と一緒に鵜渡越にある親鸞聖人の銅像へ車で向かい、途中とても険しい山道でありましたが、無事に到着しました。歩いて広場を通り抜けると小高い丘の上には、親鸞聖人が私たちを「ようこそ」と言わんばかりに待っていてくださいました。想像以上の大きさとなんともいえない親鸞聖人の優しい表情に一同自然と手が合い、「なまんだぶつ　なまんだぶつ」鵜渡越の親鸞聖人は九十九島を眺めながら雨の日も風の日も暑い日も寒い日も私たちを見守ってくださっているのだなと思いました。

今回のご縁を通して先人の人たちの想いを汲みながら次世代に伝えていくことの大切さを知ることが出来ました。今後とも長崎教区の皆様、そして御同朋・御同行の皆様と共に連携を広報部としての活動を深めていきたいと思います。

（文：島原南組 徳法寺 安居院 真矢子）

鵜渡越　親鸞聖人像

後方に発見！
親鸞聖人のおひざ元で合掌姿の弁円

取材後記

今回の取材にあたりまして、険しい山道にも関わらず、正法寺のご住職さまの先導と教務所の永井先生のすばらしい運転で広報部一同鵜渡越の親鸞聖人像にお参りさせていただくことが出来ました。